

黒崎周一著『ホメオパシーとヴィクトリア朝イギリスの医学 -科学と非科学の境界-』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅原, 未宇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22456

【書 評】

黒崎周一著

『ホメオパシーとヴィクトリア朝イギリスの医学』

——科学と非科学の境界』

(刀水書房, 2019年)

菅原未宇

現在も世界はなお、新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の流行に曝されている。目下のパンデミックが起こる以前に公刊された本書は、恰も状況を予見するかのように、この2年間、感染症への対応の過程で我々が再三意識させられることになった、科学的な医療と非科学的な医療とを分けるものは何かというテーマについて、現代の科学的医学の原型が確立したとされる19世紀のイギリスにおけるホメオパシーをめぐる論争の分析を通じ、歴史的な考察を試みる。

まず、本書の構成と概要をまとめよう。

序論

第一節 科学と疑似科学の境界設定

第二節 異端医学の研究史

第三節 本書の構成

第一章 ホメオパシー、イギリスに來たる

第一節 医師は病気を治せない

第二節 ホメオパシーに惹かれる医師

第三節 ホメオパシーの組織化

第二章 ホメオパシーを排除せよ

第一節 「異端」の弾劾

第二節 「異端」の追放

第三節 レッセ・フェール国家と医学

第三章 競争なくして進歩なし

第一節 役に立てばそれでよし —チャリティの活用

第二節 ホメオパシーからの挑戦状

第四章 ホメオパシーは商機

第一節 薬剤業の専門職化と医薬品産業の拡大

第二節 商人か専門職か？

第三節 ホメオパシーは儲かる

第五章 ホメオパシーを再構築する

第一節 薄めれば薄めるほど効く？

第二節 科学的治療とホメオパシー

第三節 顕彰されるハーネマン

第六章 治療を科学する

第一節 医学における「精密性」

第二節 正統医学によるホメオパシーの「剽窃」

第三節 治療のためなら議論も厭わず

第七章 医学に「正統」は存在しない

第一節 デイズレイリの死

第二節 医学における「正統」と「異端」

第三節 湧き起こる反セクト主義

第八章 医学の一派「アロパシー」

第一節 「アロパシー」の普及

第二節 いかなる「パシー」でもない……

第三節 政治や宗教における「アロパシー」

結論

序論ではホメオパシーをめぐる研究史が整理される。ホメオパシーとは、ドイツの医師 S.ハーネマンが、18世紀末から19世紀初頭にかけて体系化した理論とそれに基づく治療法である。ある病気の治療には健康時に服用してその病気と同様の症状を引き起こす薬品が有効であるという「類似の法則」と、治療に用いる薬品は薄めれば薄めるほどその効能が増すという希釈の推奨を特徴とする。

現在、科学者からはその有効性が否定され、ホメオパシーもその中に位置づけられる疑似科学について、科学史家はそれと科学とを分ける境界線

の歴史的・社会的な構築のあり方、当事者自身の構築のための戦略を明らかにしてきた。医学史の先行研究も、総じてホメオパシーを含む異端医学を、19世紀に進行した医師の専門職化への対抗文化として、まさに歴史的・社会的に構築されたと位置づけるが、ここで著者は、当該期の医学の「正統」と「異端」を分ける境界線はしばしば曖昧で、その確定の過程は単線的ではなく、「寛容」と「不寛容」という別の境界線も浮上する複合的なものであったことに注意を促し、その背景に、19世紀イギリスの自由放任主義があったと指摘する。その上で、レッセ・フェール国家の下、学知が「知識の複合体」の中で構築されたとするM.ドントンに示唆を得、国家や任意団体、市場など「知識の複合体」を構成する様々な主体が医学の境界設定に与えた影響を考察するとともに、「正統」と「異端」とは異なる「寛容」と「不寛容」の境界が設定される経緯を分析することを通じて科学的医学の形成過程を再検討すると、本書の目的を明示する。

第1章では、ホメオパシーが伝わった19世紀前半のイギリスにおける医師の状況を概観した後、ホメオパシー支持者の様相と彼らの支持の理由、支持拡大のために推進された組織化について論じる。第2章では正統医学によるホメオパシーへの批判、病院や医学会、医学誌からの排斥の様相を検討した後、1858年医師法に焦点を当て、ホメオパシーを非合法化し、「知識の複合体」から排除する試みが挫折した過程について論じる。同法はレッセ・フェールの考えに則り、営業の自由、患者による医師選択の権利を保障し、自由競争によって医学の発展を助長する内容となり、正統医学の多くの医師が画定しようとした「正統」と「異端」の境界線に異論を唱えて「寛容」と「不寛容」の境界線が構築される素地を提供した。

第3章では、チャリティ施設を梃子に正統医学の構築する境界線を克服しようとするホメオパシー医の試みと、それに対する地域社会の反応を検討する。ホメオパシー医たちはチャリティを大義名分に独自の病院・診療所を設立し、正統医学側が構築する境界線を侵食しようとした。その結果、地域社会では、信奉する医学理論に関わらず貧民救済に貢献する医師が概して評価を得ることになった。このような状況下で、正統医学側がただホメオパシーを「異端」、「非科学」として斥け

るだけでは、世論が納得するとは限らず、それどころか、その不寛容な態度が、1858年医師法で保証された「自由競争による科学の発展」を妨げているとの批判を受ける恐れさえあった。第4章では、医師同様に専門職化を進めていた薬剤師に焦点を当てる。医療の商業化の流れの中で、ホメオパシーは薬剤師にとって魅力的な商機と捉えられ、彼らの商魂に基づくホメオパシー商品の流布は、正統医学を標榜する医師が躍起になって設定しようとした「正統」と「異端」の境界線を無化するものであった。

第5章は、イギリスのホメオパシー医がホメオパシーの普及を望んだ背景を明らかにする。彼らの多くは「類似の法則」を評価する一方、天文学的な希釈には懐疑的であり、ハーネマンの考えを盲目的に受容したわけではなかった。彼らは、既存の治療に科学性が欠如しているという問題意識に基づき、健康体での治験を提唱して薬品の効果を確認する方法を確立し、経験と観察から治療の指針となる法則性を明らかにした「科学的治療の創始者」としてハーネマンを位置づけ、ホメオパシーを広めようとしたのである。第6章は、イギリスにおける正統医学がホメオパシーとの学術的交流を行っていった背景について論じる。実験室医学の発展により、現場の治療の後進性をより意識するようになった正統医学の医師は、科学的治療を実現すべくホメオパシー医の知見を剽窃することを辞さなかった。また、第4章で確認した通り、商売人としてホメオパシーに注目していた薬剤師向けの媒体である薬学雑誌を、医学雑誌ではタブー視されたホメオパシー医との交流チャンネルとして用いることもできた。そこでは、科学的治療の追求という共通の問題意識を背景に、正統医学とホメオパシーの双方の医師が、治療の法則性や薬効に関する議論を交わっていたのである。

第7章では、死の床にあった元首相B.ディズレイリの治療をめぐる行われたホメオパシーの排斥に対する世論の反発と、正統医学の内部から出てきた異論を分析する。ディズレイリの主治医J.キッドをホメオパシー医と見做し協力を決めたクエインら医師たちの行動は、正統医学の中でこそ「正統」と「異端」の境界線を護持したと評価されたものの、一般の人々の目には、患者の命よりも医師の慣習を優先する傲慢な態度と映ったのである。さらに、批判は正統医学の倫理観だけで

はなく、彼らが掲げる科学的医学像にも向けられた。正統医学はホメオパシーを「異端」とし、その排他性を強調することで、自らの科学的な正当性を誇示しようとしたが、その頑なさが逆に、彼らの科学性への疑念を抱かせることに繋がった。ホメオパシー医も、科学の世界に「正統」と「異端」という対立軸を持ち込んで自分たちを排除する正統医学の側を、セクト主義的で「不寛容」であると批判していた。正統医学の中からも自由や寛容の観点からホメオパシーの排除の見直しを進める動きが見られ、そうした過程で構築されたのが科学的な医学と非科学的なそれを分ける「寛容」と「不寛容」の境界線であった。

第8章は、ホメオパシーの対義語としてハーネマンが生み出したアロパシーという概念の導入が、境界設定に与えた影響を考察する。アロパシーとホメオパシーが併記されることで、正統医学も医学の一派として相対化され、「正統」と「異端」の境界が後景化することに繋がった。また、強制的教会税などに代表される国教会の優越性が見直しが議論される中、国家がどこにも肩入れせず、アロパシーやホメオパシーといった複数の学派が併存している医学界の状況が好ましいものとして参照されていた。「寛容」と「不寛容」の境界線の構築の背景には、そうした宗教界と医学界の相互参照があったと結論づける。

以上が本書の概要である。評者の考える本書の意義は、19世紀イギリスにおけるホメオパシーと正統医療の間の境界画定をめぐるせめぎ合いという過去の具体的な事例の検討から、副題ともなっている科学と非科学の境界の画定が困難な現代医療の状況を逆照射していることである。また、ホメオパシーの雑誌や医学雑誌を中心に、薬剤師向け雑誌、医学書、パンフレット類、地方新聞、病院文書などの広範な史料の分析に基づき、国家、医師、薬剤師が主導する市場、チャリティ団体、世論など「知識の複合体」を構成する様々な主体が科学的な医学と非科学的なそれを分ける境界線の構築に関わっていく過程を明らかにした点は、大きな学術的貢献と言えよう。

しかし、読者として気になった点もいくつかある。第一に、本書の議論と医師ないしホメオパシー医の専門職化との関連である。序論で著者は、ホメオパシーを含む代替医療の歴史が研究されるようになった契機として、社会学における専門職論

を挙げ、1970年代以降、近代医学への批判の高まりとともに、医師の専門職化が、国家や患者からの自律性を獲得し医師が医療を独占することで、専門職支配を確立する過程として捉えられるようになったとまとめる(10頁)。では、本書で雄弁に明らかにされた19世紀イギリスにおける正統医学の「正統」性の揺らぎ、ホメオパシーとアロパシーとの間の競合や交流は、医師の専門職化の過程の中でどのように位置づけられるのであろうか。

第二に、「正統」と「異端」の捉え方である。著者は、ホメオパシーを批判する正統医学側の論理について、「ホメオパシーを正統医学とは異なる信頼できない「他者」として位置づけることで、翻って正統医学を信頼できる、文字通りの「正統」の医学として読者に印象づけ」と同時に「ホメオパシーを宗教上の「異端」や「セクト」になぞらえることで、その排他性を強調し、排斥の正当化も図っていた」(186頁)とする。別の箇所でも、「正統医学はホメオパシーを「異端」として他者化することで、自分たちの科学的な正当性を誇示しようとした」(201頁)と叙述していることから、正統を自認する側がホメオパシーを異端であり他者であると見做して排斥したと解釈しているように思われるが、これには若干の違和感を覚えた。なぜなら、16、17世紀のイングランド史を研究する評者の理解では、「異端」とは「正統」すなわち唯一の正しい信仰からの逸脱であり、仮に「正統」の側が「異端」を異なる信仰を持つ他者として捉えていたとすれば、あれほど激しいカトリック・プロテスタント間の対立やセクトの迫害は起こらなかつたらうからである。

さらに、信仰の正しさ、「正統」性は排斥ではなく改宗や改悛を通じ、異端思想を撤回させることによって証明されるものでもあった。そうした観点から、19世紀イギリスの「正統」医学を自認する医師たちの間で、ホメオパシー医を転向させようという積極的な活動が見られなかったのかどうか、著者の問題設定から外れることは承知しつつ、敢えて問うてみたくなる。同様に、かつてホメオパシー協会に所属しながらホメオパシーとの関係は絶ったと証を立てた、いわば「改宗者」たるディズレイリの主治医キッドに対して、「正統」医学の正しさを証明する存在として好意的に接するべきという異論は正統医学の側から出な

かったのであろうか。

もっとも、本書で考察された医師たちは「異端」の語を、異なる意味で比喩に用いていたのかもしれない。例えば、エディンバラ大学のシンプソン教授は、ホメオパシーを「異端の宗教」として指弾し、「キリスト教会が自分たちから、イスラーム教、仏教、モルモン教、スウェーデンボルグ主義を信奉し、その教義を実践する人々を切り離すのと同じくらい」、ホメオパシー支持者を排除することは正当性があると主張している（185頁）。異端医学を指して、「医学のユダヤ人、医学のトルコ人、医学の異教徒」（197頁）という比喩もなされた。いずれも異端と異教を混同し、同一の俎上に載せていたことを窺わせる。17世紀後半以降のイギリスにおける宗教の複数性の定着を鑑みれば、この認識は不思議ではないように思える。しかし、彼らが宗教の複数性を前提としていたのであれば、なぜ他方で「正統」を主張できたのであろうか。本書でほかにも多数引用されるこれらの宗教的比喩を追究することは、19世紀イギリスにおける宗教観を探る手掛かりとなりそうである。

第三に、二点目の指摘と関連するが、科学的治療を追求しようとした当時の医師たちの信仰についてである。19世紀中葉以降のイングランドでは、知識人を含めた改宗者の存在によりカトリックが地歩を築いていったことが知られている。また、国教会内部では1860年、広教会派の立場から聖書批判と科学研究の成果の尊重を主張した神学論集が公刊され、激論を引き起こした。他方、1874年のイギリス科学振興協会における講演は、キリスト教を科学に敵対するものと見做す考えを広めたとされる⁽¹⁾。本書では、非国教徒が異端医学を支持する傾向にあったこと、ホメオパシー医が非国教徒の過去の足跡を自分たちの模範例と考えていたこと（123, 226～228頁）が明らかにされているが、ホメオパシー医自身は一体どのような信仰を有していた、あるいは無信仰だったのだろうか。

また、「神学において、ヴァチカンの学者たちが正統の境界線を堅持している」と述べる王立内科医協会の幹部（184頁）は、ローマ教皇の正統性を前提視しているように読めるが、彼ら正統医学の医師たちの信仰の状況はどのようなものであったのだろうか。「寛容」と「不寛容」の境界

線が「当時の宗教情勢にも規定されながら構築された」（231頁）のであれば、なおさら「正統」や「異端」、「寛容」、「不寛容」などの宗教的比喩を用いたそれぞれの医師が、どのような宗教的立場からそれらの言葉を発したのかについても問われるべきではなかろうか。

以上、評者なりに本書の意義、感想そして若干の疑問点を述べたが、誤読による的外れな指摘があるとすれば著者および読者のご宥恕を請う次第である。また指摘が妥当であるかどうかにかかわらず、本書の意義が揺らぐことはない。「科学的根拠に基づく医療」が、医学研究の成果を最良の根拠としつつ、有効性が未だ厳密に確認されていない治療法でも、次善の根拠に基づいて採用の可否を判断するよう現場の医師に要請するという結論部での著者の指摘（239頁）は、例えば、新型コロナウイルス感染症の治療に携わる一部医師の間で、なぜ検証の十分になされていない「特効薬」の使用が推進されてきたのかを解き明かす鍵となるように思われる。本書が19世紀イギリスの事例から説得的に明らかにしたように、まさに現代医療においても、一方が他方を非科学的と断罪すれば科学と非科学の境界が画定するわけではないのである。

その点に関連して本書はまた、19世紀イギリスにおける科学的医学と非科学的なそれとの間の境界画定の過程で、既存の治療に対する広範な不信感が作用したことを指摘するが、現在の日本で感染症対策を提言する科学者、そして専門家の様々な提言を踏まえ対策を判断・遂行する行政担当者は、科学や行政に対する不信感の充満をどれほど意識し、国民とのコミュニケーションに反映させようとしているだろうか。こうした今日の課題を考える上での道標として、本書は今まさに読まれるべき著作であり、多くの人の手に取られることを願ってやまない。

注

- (1) シェリダン・ギリ、ウィリアム・J・シー ルズ編（指昭博、並河葉子監訳）『イギリス宗教史』法政大学出版局、2014年、18章；松永俊男『ダーウィンの時代—科学と宗教—』名古屋大学出版会、1996年、6, 7章。